

輪中地域の景観保存

伊藤安男

木曾三川の合流する流域は古来よりの洪水常襲地帯であった。そのため流域住民は度重なる洪水への対応として、自普請にて集落や耕地を水害から防御するため、その周辺を堤防でめぐらす囲堤を築いた。この囲堤のことを輪中と称した。そして輪中内の人々はこの輪中を生活の単位として強固なる水防共同体を形成してきた。

この輪中は明治初年は約80を数えた。その分布範囲も南は三重県長島町、北は岐阜市、東は愛知県海部郡（現愛西市）、西は岐阜県養老町におよび、南北約50 km、東西約20 kmの逆三角形となり、大阪府とほぼ同じ約1,800 km²の広大な面積に輪中地域を形成している。

水防共同体である輪中地域は運命共同体としての特異な地域社会を構成しているだけでなく、景観的にも他の地域ではみられない特異な地域であった。

それを代表するのが農業的土地利用では

「堀田（堀上げ田と堀潰）」であり、集落では「水屋建築」（以下、水屋と呼称す）である。

この二大特色のうち、堀田は第2次大戦後の輪中干拓土地改良事業により埋立てられ、現景観から消失した。これにはついて現在になって、その一部は産業遺跡として残すべきであったという声もよくきかれる。

一方の水屋は、治水事業の進行による水害の減少や、また所有者である富裕農民の地主階級が戦後の農地解放により維持管理が困難となったために、取り壊されていったものの、現在でもなお多くみられる。

このように過去の遺物化して減少傾向にあった昭和51(1976)年9月12日に、岐阜県安八町大森にて長良川本流が破堤して大きな被害をもたらした。その他の地域でも内水氾濫により輪中地域の大半が湛水被害をうけた。

この9.12輪中水害の結果、水屋の必要性が再認識され、伝統的な輪中民の生活の知恵

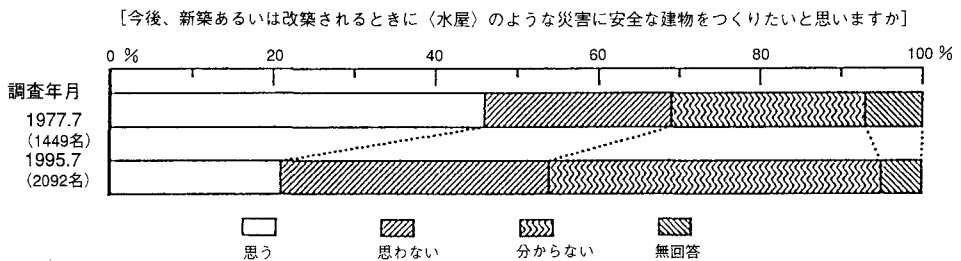


図1 アンケートにみる水屋意識

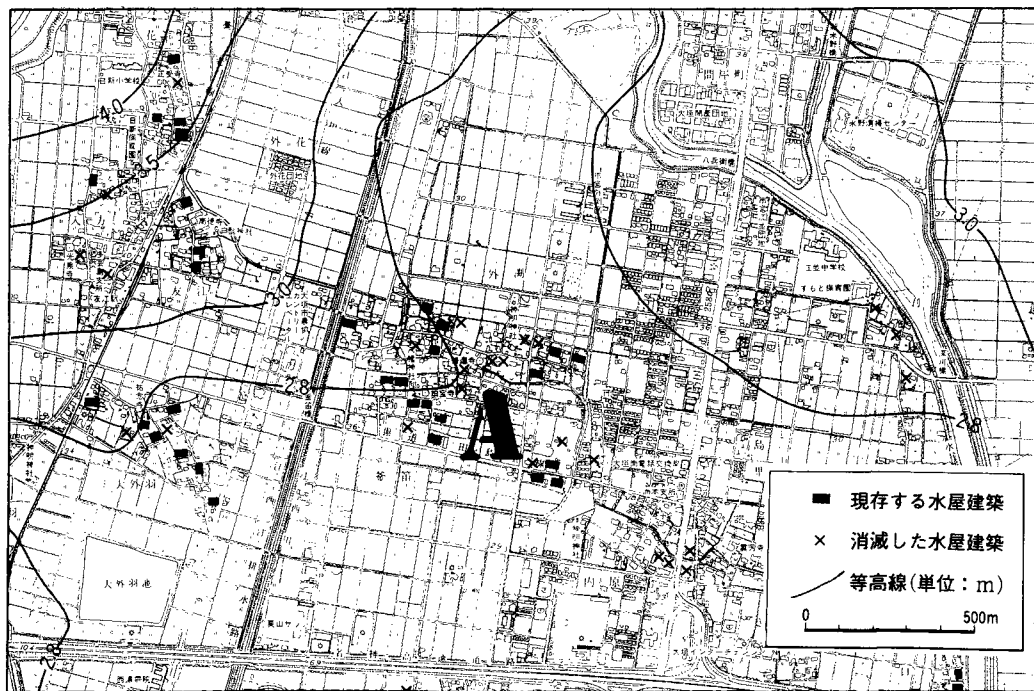


図2 水屋分布—A〔釜笛〕地区（輪中研究会調査による）

が見直された。それを証左するのが図1のアンケート調査の結果である。具体的には水害の翌年の昭和52(1977)年に、水屋をもたない1,449世帯を対象に「今後、新築あるいは改築されるときに〈水屋〉のような災害に安全な建物をつくりたいと思いますか」に対して、約半分の45.7%の人々が「思う」と回答している。しかし18年後の平成7(1995)年に同じアンケート調査をした結果、「思う」と回答した人々は20%と大きく減少している¹⁾。

輪中民の水屋意識がこのような傾向を示す中で、平成15年に文化財保護法が改正され、新しく文化的景観が位置づけられた。その一環として大垣輪中南部の釜笛地区（大垣市釜笛町）の水屋群が「固有の風土的特色を顕著に示すもの」として、文化庁より「文化的景観重要地域—田園と輪中集落との複合景観—」に選定された。

しかし水屋はたんなる文化的景観ではなく、洪水への対応として生じたものだけに、水害の悲惨さを後世に伝える語り部的存在で

ある。いうならばその地域住民の防災意識を高めるための防災景観であり、現在も機能していることを強調しておきたい。

いうならば洪水と人間の相剋の歴史を端的に象徴するのが水屋である。

輪中の代表的景観である水屋もさきに述べたように減少傾向にある。

例えば文化的景観に選定された釜笛地区でも、聞きとりによる悉皆調査によると、かつて15棟の分布をみたものが、平成2年には10棟に減少している〔図2～4、表1参照〕。

水屋分布については、現在の棟数については調査することはできるが、かつての棟数、とくに戦前については聞きとり調査および残された基壇などによる以外に調査方法はない。

ただ昭和10年に秋山恒士氏による部分的な調査が一例のみみられる。それと現在の分布状況とを比較したのが表2であり、それを分布図としたのが図5である。

調査地域は現在の大垣輪中内の小輪中であ

表1 釜笛地区の水屋調査表 (輪中研究会調査による)

集落名	旧階層	旧土地面積	現 状	建造年	位 置	水 屋				基 壇		備 考	
						棟 数	材 質	構造	何 階 か	高 さ	側 面 材 料		
釜笛1	自作	?	現存	終戦後	?	倉庫	土蔵	4.0×5.0	中2階	3.5	雑木	土盛り一部石垣	自作中心。終戦後にNさんより譲り受け建てる。建てる前に小さな水屋があった。基壇の母屋に面した方の底部(1m)のみ河原石の石垣。保存良好。
々2	自作	1.2	現存	昭和36年	SE	倉庫・住居	土蔵	2.0×3.0	中2階	3.2	雑木	土盛り	以前は屋敷の東北隅にあり、隣の水屋と隣り合わせに建てていたが、150年以前に同じ時期に隣の水屋と一緒に今の位置に移したようだ。壊れかっていたので昭和36年に同じ大きさに改築した。基壇は3尺積上げて2階には水が絶対につかないようにし、幅周り(0.7m)を石垣積み。1階は土蔵(物置)で2階には座敷(4.5畳と6畳)。モ子の木は成長が早く丈夫、舟を繋ぐために使用。
々3	自作	1.6	なし	?	NW	倉庫	?	2.0×3.0	平屋	3.0位	雑木	土盛り	水屋は2部屋あった。建物は痛んでなかったが、40年以前に壊した。母屋の西に家を新築したがその盛土に「土」が散り落ちて壊した。
々4	地主	26	現存	明治初年	W	倉庫・土蔵・住居			中2階	4.2	(備考)	石垣(丸石)	水屋は2棟。医院。
々5	地主	1	現存	昭和7年	SW	倉庫	土蔵	2.0×3.0	中2階	1.8	なし	石垣(赤坂石)	隣の水さんの水屋と隣り合わせ。鬼門にあたり場所は良くない。基壇の土盛りがよく壊れたので1昨年みかけ石で積み直した。棟木に昭和7年3月22日建の記録。
々6	自作	?	現存	昭和30年	WNW	倉庫	土蔵	2.0×3.5	?	3.5	なし	土盛り	基壇の東側(母屋側)は石垣積み(元は土盛り)。前のものは壊れかかったので10年ほど前に新築(基壇2.0mUP)。周囲の木は木の葉を囲り切った。
々7	地主	?	現存	昭和30年	NW	倉庫	土蔵	2.0×3.5	中2階	2.1	なし	土盛り	以前から水屋はあった。新築したのは御先祖様のもので、昔水屋で働かたという話もよく聞くし、欲しいわけでもないが建てた。汚れるので周囲の木は切った。
々8	地主・自作	3.6	現存	明治初年	NW	倉庫	土蔵	2.0×2.5	中2階	1.7	雑木・竹	土盛り	百姓にとって竹は種はさなどに使うため要る。昔は水屋に上げ舟があったが今はない。1階は米倉と物入れ。
々9	地主	5.0	現存	?	NW	倉庫	土蔵	2.0×3.5	中2階	3.9	雑木	土盛り	基壇の南(母屋)側は石積み(赤坂石、花崗岩)。以前の水屋はNE方向であったが、かつては横に水路があり用心が悪かったのと方角も良くなかったので替えた。
々10	地主	25.0	基壇のみ	?	N	倉庫・住居	土蔵	?	中2階	4.0	雑木・竹	石垣(切り石)	かつては水屋は3棟(3部屋の住居、倉庫、味噌・他など)あった。屋敷他のSEに水屋機能をもつ3×5間の米倉あり(大正12年建)。
々11	地主	?	現存	?	NW	倉庫	土蔵	2.0×4.0	?	3.0	雑木	土盛り	基壇の母屋側は1段の赤坂石による石積み。
々12	自作	2.8	現存	昭和54年	W	倉庫	木造	?	中2階	1.7	雑木	土盛り	昭和54年「暮らし」として新築。大正初年ころまであったものは2階建ての住居。基壇の木を切ったら根が腐り土手が流出し西の川へ流れた。
々13			現存せず										空き家状態。
々14			現存										無住にて入れず。
々15													184-1番地。廃舎の築。

表2 水屋分布の変化 (禾森輪中・西中之江輪中)

町 名	1935年			1990年		
	棟数	総戸数	割合	棟数	総世帯数	割合
東高橋(含む江崎)	3	33	9%	3	135	2%
長 沢	11	52	21%	5	156	3%
禾 森	22	69	32%	10	212	5%
東 前	9	40	23%	4	103	4%
犬 ケ 淵	5	13	38%	3	88	3%
大井(旧福田新田)	7	29	24%	3	235	1%
築 捨	13	103	13%	4	318	1%
計	70	339	21%	32	1,247	3%

1935年の資料は秋山恒士氏の調査により、1990年の資料は大垣輪中研究会(代表伊藤安男)の調査による。調査地域については、秋山恒士氏の調査した地域のみ限定して比較した。

この^{のぎのもり}禾森輪中と西中之江輪中で昭和10年に70棟の分布をみたことが調査報告されている。同じ地域を平成2年と比較すると約半数の32棟に減少している²⁾。

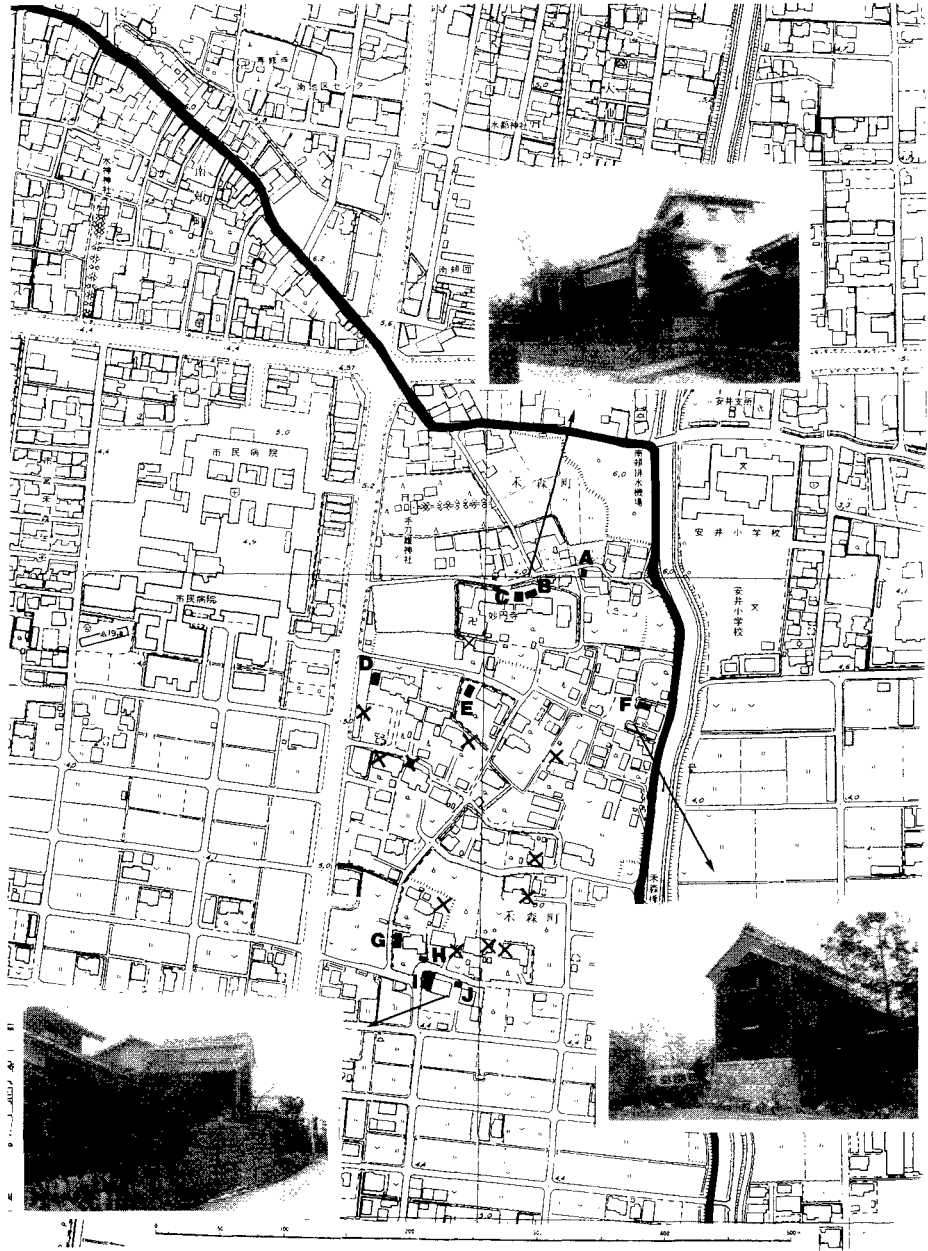
消滅過程については均一的にとらえることはできない。大垣輪中は複合輪中であり、10の小輪中によって形成されており³⁾、各小輪中によって水意識、すなわち水防意識に落差がある。小輪中の一つである十六輪中は現存



図3 改築された水屋—大垣市釜笛町 (文化的景観重要地域選定地区) (2002.2.伊藤安男撮影)



図4 改築された水屋—大垣市釜笛町 (文化的景観重要地域選定地区) (2003.10.伊藤安男撮影)



図中記号	建築年代	型式分類	図中記号	建築年代	型式分類
A	大正初期	倉庫式	F	昭和初期	土蔵住居式
B	江戸後(その後改築)	土蔵式	G	不詳(その後改築)	住居式
C	不詳(その後改築)	倉庫式	H	不詳	土蔵式
D	不詳(その後改築)	住居倉庫式	I	不詳(その後改築)	住居式
E	明治初期	土蔵式	J	戦後	倉庫式

×：かつて存在したが、現在は消失したもの
 -：輪中堤

図5 禾ノ森地区の水屋分布

棟数は17棟であるが、消滅棟数は3棟にすぎない。また綾里輪中は現存棟数8棟に対して消滅棟数13棟という例もある。

水屋建築を文化的景観としてどうとらえるか⁴⁾。筆者はこの稿で、これらの輪中の象徴的景観(要素)たる水屋、上げ舟、上げ仏壇、屋敷森の防水林、^{かまえばり}構堀などが一体として、たんなる文化的景観ではなく防災景観でもあることを強調したい⁵⁾。

(花園大学名誉教授)

〔注〕

- 1) 伊藤安男編著『変容する輪中』, 古今書院, 1996, 23~24頁。
- 2) 大垣市『大垣輪中調査報告書』, 1988, 13~18頁。
- 3) 古大垣, 東中之江(古宮), 西中之江, 禾森, 浅草, 今村, 静里, 綾里, 十六, 大野の各輪中。
- 4) 文化庁文化財監修『日本の文化的景観』2005, 176頁。

- 5) 伊藤安男「水屋・水塚・段蔵—日本各地の防水建築—」KISSO60, 2006, 国土交通省木曾川下流河川事務所。

水屋と同じ機能をもつものに淀川流域の「^{だんぐら}段蔵」, 利根川流域の「^{みづか}水塚」などがある。これらを総称して筆者は“防水建築”なる用語を用いているが、一部には“水防建築”と称する研究者もいる。この論については注4)で見解を述べている。

〔付記〕

筆者による輪中に関係の主要な文献として下記のものがある(単行本のみ)。

- 『写真集 輪中—水と闘ってきた人々の記録—』, じゃこめてい出版, 1976。
- 『輪中—洪水と人間, その相剋の歴史—』(共著者: 青木伸好), 学生社, 1979。
- 『ふるさとの宝物 輪中』, じゃこめてい出版, 1992。
- 『治水思想の風土』, 古今書院, 1994。
- 『変容する輪中』, 古今書院, 1996。

Preservation of the Historical Landscape, *Waju*

ITO Yasuo (Hanazono University)

Key words: Food vulnerable area, Flood control, Ring levee (Waju), Escape warehouse (Mizuya), Landscape for flood prevention, Regional-cultural heritage